

第6表 6区出土石器観察表

掲載 頁	図 番号	掲載 番号	出土 層位	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
20	18	41	SI 1 内	磨石	砂岩	8.7	5.1	3.85	236	
22	20	61	IVb	石鍤	黒曜石	1.7	1.2	0.4	1.0	
		62	IVa	スクレイパー	ホルンフェルス(1)	7.4	6.9	1.6	114.0	
		63	Va	スクレイパー	ホルンフェルス(1)	7.3	8.4	3.0	147.0	
23	21	64	Va	スクレイパー	ホルンフェルス(2)	11.4	6.2	2.2	134.0	
		65	一括	スクレイパー	ホルンフェルス(1)	4.9+ a	4.1	1.3	35.0	
		66	一括	スクレイパー	ホルンフェルス(1)	6.5	5.4	1.1	39.0	
		67	Va	スクレイパー	ホルンフェルス(1)	11.7	7.4	4.0	314.0	
24	22	68	IVa	石錐	砂岩	7.6	6.4	1.8	105.0	
		69	IVb	敲石	砂岩	9.8	5.4	3.6	265.0	
		70	一括	敲石	砂岩	11.3	4.3	4.8	507.0	
		71	IVb	敲石	砂岩	9.4	3.4	2.8	148.0	
		72	IVa	凹石	砂岩	7.9	5.0	4.4	247.0	
25	23	73	IVa	磨石	砂岩	6.5	6.3	2.8	199.0	
		74	一括	敲石	砂岩	11.0	4.0	3.3	179.0	
		75	一括	磨石	砂岩	9.3	7.3	2.7	367.0	
		76	VII	磨石	砂岩	9.8	8.1	3.0	325.0	

本書で用いる石材の名称について

- ・ホルンフェルス(1)：表面の色調は黒味または灰褐色であり、粒子が粗いもの
- ・ホルンフェルス(2)：表面の色調は褐色または灰褐色であり、磨滅の著しいもの

第Ⅲ章 総 括

本遺跡の主体は縄文時代早期である。出土土器はほぼ別府原式土器である。これは、先に報告された2区、3区、5区と共に通しており、別府原式期、本遺跡全体で集落が営まれていたと考えられる。別府原式土器の標識遺跡である別府原遺跡は本遺跡と同じ尾根筋に当たることから、本遺跡は別府原遺跡の強い影響を受けて形成されたと考えられる。その一方で、別府原遺跡で300基以上も確認された炉穴は、2区で確認された1基において、その可能性が考えられるのみである。別府原遺跡で確認された炉穴は、南側の斜面地に集中して作られることから、平坦ないし北側へと下る傾斜地に当たる本遺跡は、炉穴を構築する上で立地上適さなかったと考えられる。

また、6区からは縄文時代後期の遺物も確認された。時期は西平式土器以降である。宮崎平野はこの土器以降磨消縄文系土器の出土量が増えるが、大淀川以北の事例が少なかったため貴重な出土資料と言える。特に、この中に在地の納屋向式が含まれないことは注目に値する。

このほか、1区からは古墳時代の竪穴建物も検出された。周辺の平野部には横穴墓で構成される佐土原村古墳や、土器焼成土坑を伴った集落である宮ヶ迫遺跡等の調査事例はあるものの、丘陵上の集落については確認例が乏しいだけに、集落の存在が確認されたことは興味深い発見となった。